

【ポスター発表】

明治期の福田会育児院の養育と教育について

○ 東洋大学 氏名 菅田 理一 (3416)

野口 武悟 (専修大学・7944)、宇都 榮子 (専修大学・207)

キーワード：社会福祉史、養育、仏教

1. 研究目的

1876 (明治 9) 年、今川貞山、杉浦讓、伊達自得によって企画され、1879 (明治 12) 年、仏教諸宗派の人びとにより設立された福田会育児院は、東京養育院、岡山孤児院などとともに当時の日本を代表する施設であるが、その活動については解明されていない部分が多い。発表者らは、福田会育児院史研究会を組織し、社会福祉法人福田会の協力を得て、その活動実態について明らかにし、社会福祉史研究の空白部分を埋める役割を果たしたいと考えている。これまで、創立の経緯と開設当初の組織の検討、設立初期の規程・組織、年表の作成、里親委託の検討などを行ってきた。本発表では、これらの既発表を踏まえたうえで、福田会育児院の養育と教育について検討し、他の育児施設との比較にも役立てたい。

2. 研究の視点および方法

福田会月報や周辺資料をもとに、養育と教育の内容を明らかにすることを目指す。まず、養育及び教育に関する記事を抽出し、規程類や関連資料と対照し、どのように在院した子どもたちの養育・教育の保障を目指していたのかを検討する。

3. 倫理的配慮

本発表では、日本社会福祉学会研究倫理指針にもとづき、入所者について述べる場合は個人が特定されないように配慮している。

4. 研究結果

規則類によると、創立以来院児を院内児童と院外児童に分けて養育することになっており、3歳を過ぎた子どもを育児院内で養育していた。のちに教育についても育児院内にて本格的な取り組みを行なうようになった。院内児童の養育と教育について、次のようなことが分かった。

(1) 育児院内での養育について

福田会は、貧困無告の子どもを対象に養育を行なっており、これらの養育の監督を創設10年後の1889 (明治 22) 年、いわゆる「上流婦人」によって組織された福田会恵愛部が担っていた。起臥、飲食、衣服、衛生、遊戯などについて、恵愛部幹事が指揮し実際の管理は保母が行なっていた。年齢及び男女の区別により各保母の担当者を決めて養育にあっていた。年長院児は、年少者を保護するなど保母に協力しており、院内における養育法が次第に確立されていった。明治 30 年代の新聞記事によると、育児室は、9室あり、1室は8畳あり、子どもの挙動を監督できる広さであった。主に6歳以上、3歳以上、病弱児といった区分で養育していた。日課は、室によって異なっており、例えば第一室は、毎

朝午前6時起床から始まり、仏壇への礼拝、讃歌斉唱後に朝食をとり、学科に臨むということになっている。また、当初は乳幼児の健康維持に十分な成果をあげられなかったが、発育に重大な影響を及ぼす乳児期を里親委託先で過ごさせるようにし、3歳以降に育児院に戻ることを原則としたところ、院児は全体的に健康が保たれるようになった。万一亡くなった子どもに対しては、育児院が置かれていた寺院内に地藏尊を安置し埋骨、そこへ院児を引率して拝ませていた。小学校卒業後の年齢くらいから「修業児」として商店などへ出されていた者もいる。

(2) 育児院内での教育について

福田会育児院創立時は、院児全員が学齢以下であり、学校教育の必要は生じなかった。その後、学齢児童への対応のために1883(明治15)年に仮の教場を院内に設けるが、実際には近隣の公立小学校に通学した。会の組織体制の整備と収容児童の増加に伴い、1893(明治25)年、福田会は東京府庁の認可を受け、院内に3年課程の尋常小学校(本科)を設置した(児童11名、1学級、教員1名)。校名は「福田会育児院尋常小学校」であった。修身、国語、算術、図画、体操、唱歌が教授された。1901(明治33)年には「尋常小学課程卒業ノ院児ヲ教育」(「補習科設置願」)する目的で2年課程の補習科の増設(1学級)が認可され、修身、読書、作文、習字、算術が教授された。教員は、本科の教員の兼務とされた。しかし、1908(明治40)年、狭小な校舎など設備が公立小学校に比して著しく貧弱であること、福田会の財政状況から小学校の維持は難しいと判断されたことなどの理由により、「福田会育児院尋常小学校」は閉校となった。以降は、児童は、麻布区内の麻布筭小学校と南山小学校に通学することとなった。その一方で、院内では、小学校卒業者を対象に、1909(明治41)年から編物、造花などの技芸教育を新たに始めている。ただし、院外修業との関係は現時点では詳らかではない。このほか、1903(明治35)年には、院内に寄贈された図書、雑誌をもって「児童文庫」が設けられ、「無量の知識を与へらるゝ良友」(『福田会月報』第13号)となった。

5. 考察

(1) 育児院内での養育について

貧窮した子どもの養育に創立当初から試行錯誤して取り組んでいたこと、仏教色を出した養育を行っていたこと、明治期を通してこれらの養育方法を完成させていったことに福田会育児院の特徴を見出せるのではないか。年齢区分ごとの養育の実態、どのような立場の僧侶によって仏教的な指導が担われていたのかについては、今後の検討課題である。

(2) 育児院内での教育について

福田会では、1893(明治25)年に「福田会育児院尋常小学校」を設置し、院内で学校教育を実施した。「費用の許す限り、成るべく徳育を進め、併せて智育体育を遍ねく完たからしむることを期せり」(『福田会沿革畧史』)と考えたのである。1901(明治33)年には補習科も新設し、その拡充を図っている。しかし、設備や費用の問題からわずか15年で閉校に至っている。その後、福田会では、学齢児の学校教育は公立小学校に任せる一方で、院内での教育は小学校卒業者に対する技芸教育へとシフトしていく。さらに、大正期になると幼児を対象に幼稚園教育にも取り組むことになるが、詳細は今後の検討課題である。